

## 岩手医科大学歯学会第59回例会抄録

日時：平成17年3月5日（土）午後1時

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室（C棟6F）

### 特別講演

ポリ乳酸製顎骨接合用材料の臨床応用

杉山 芳樹

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

顎顔面骨骨折や顎変形症などの骨接合には種々の生体用材料が応用されている。骨接合材料を歴史的にみると、すでに20世紀初頭には金属プレートが臨床応用されている。本格的な金属プレートの顎骨への使用は1970年頃からであり、ステンレス製プレートが圧迫骨接合術用材料として使用されている。1980年代には生体親和性のあるチタン製のプレートが使われ始め、現在に至っている。しかし金属材料は、長期間生体に存在した場合に骨の萎縮や溶出による金属そのものの毒性やアレルギーの問題がある。実際、不動態膜を形成するため生体内で安定しているとされるチタン材料でさえ、PIXE法による微量元素分析で、周囲軟組織に多量のチタン元素が観察される。そのためわれわれは、骨創の治癒後に金属製骨接合材料の除去術を原則として行っているが、結果的に患者は二度の手術を受けることになる。このような背景から、1991年から顎骨接合用のポリ乳酸製吸収性プレートの開発を行い、1997年に厚生省（現・厚生労働省）の臨床使用認可を得た。現在同吸収プレートは、口腔外科のみならず整形外科、脳外科、形成外科、耳鼻科などの各科で臨床応用されている。

ポリ乳酸は骨接合用材料だけでなく、圧電素子としての性質や生体吸収性から、化骨促進や再生工学の足場材、薬剤徐放基剤など歯科各科での新たな応用が考えられる。今回は、われわれのポリ乳酸製吸収性プレートを開発した経緯や現在までの全国での使用状況や問題点について紹介した。

### 一般演題

演題1. 舌痛症患者の vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> 異常例に関する検討

○瀬川 清, 加藤 秀昭, 青村 知幸,  
八木 正篤, 太田 敏博, 中島 崇樹,  
松尾 徹也, 水城 春美

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

目的：舌痛症の原因は、明確でないことが多く、全身的には貧血、低栄養状態、ビタミンB群欠乏症などが考えられている。そこで今回、われわれは、舌痛症患者のスクリーニングにおける vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> の血液検査をいかに進めるべきかの指針を得る目的で、vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> の血中濃度に異常を認めた症例の検討を行ったので報告した。

対象：1999年から2003年までに当科を受診した舌痛症患者129例のうち血液検査を施行した症例は79例であった。それらのうち、vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> の血中濃度検査を施行した27症例を対象とした。

結果：Vitamin B<sub>2</sub> 低値は6例、B<sub>6</sub> 低値は1例に認められた。逆に高値例は、B<sub>2</sub> が5例、B<sub>6</sub> が13例で、B<sub>2</sub> 高値の4例はB<sub>6</sub> も高値であった。Vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> 低値例の多くは、通常の舌痛症の治療に加え、ビタミンB複合製剤を投与し、舌痛が改善された。また、vitamin B<sub>6</sub> 高値例のうち比較的高値の7例は、ビタミン剤や健康食品の長期連用者であった。

考察：舌痛症の一部には、vitamin B<sub>2</sub> 欠乏例が含まれている場合があり、難治性の舌痛症例の場合は vitamin B<sub>2</sub> の血液検査の必要性が示唆された。Vitamin B<sub>6</sub> の血中濃度高値と舌痛との関連については、一部の症例では過剰症も危惧されたが明確なことはいえなかった。

結論：以上より、舌痛症患者の一部には vitamin B<sub>2</sub>, B<sub>6</sub> の欠乏や過剰を認める場合があり、難治性の場合には、一度それらの血液検査を検討することが必要と考えられた。